opusdei.org

# いつくしみの特別聖 年に関する属人区長 の書簡(2015年11月 4日)

この特別聖年を決定された教皇に、行いと祈りで感謝しましょう。教会と世界にとって本当の恩恵の時です。

2016/03/07

PDFダウンロード

DOCダウンロード

愛する皆さん、イエスがわたしの子 どもたちをお守りくださいますよう に!

1. 「わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた神、慰めを豊かにくださる神」(2コリント1,3)、「憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛し、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし(…)、キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました(エフェソ2,4-6)」。

聖パウロのこの言葉を中心に話を進めようと思います。教皇フランシスコが、第二バチカン公会議閉幕五十周年に当たって呼びかけられた「いつくしみの聖年」のため、でき得る限り良い準備をしたいと思いしたためることにしました。周知のように、聖年は12月8日に始まり2016年

11月20日の王であるキリストの祭日で幕を下ろすことになっています。

教皇がこの特別聖年の開催を予告されたとき、それが属人区のマリア年の最終期に合致していることにキリスト者としての喜びを覚えました。聖マリアの連祷で唱えるようにRegína famíliæ(家庭の元后)、Mater misericórdiæ(あわれみの御母)であられる聖母のさらなるご保護を表わすしるしとして、その知らせを受け取ったのでした。

聖母の執り成しを通して主のいつくしみに与るようにしましょう。に耳といっても、わたしたちの願いけても、個け、個人の必要に応じて前のです。神愛全な拠り所です。は、愛全な拠り所ですは、愛徳増である。大変をよりになるのできるようになるのできるようになるのできるより人類家族とその歴史をより人間に

しょう。イエス・キリストは父のい つくしみ深いみ顔を表わしているの ですから。

2. Deus, cui próprium est miseréri semper et párcere: súscipe deprecationem nostram[3]、いつも 憐れみ深く寛大な神よ、わたしたち の願いを受け入れてください、と毎 日わたしたちは祈っています。いつ くしみこそは、神の全てを要約する 特質であり、わたしたちは、教会が 勧めるように、常にいつくしみの心 を深めるようにすべきです。それを 子としての信頼をもって実行しま す。この特別聖年を決定されたと き、教皇はこう述べておられます。 いつくしみは「三位一体の神秘を明 らかにすることばです。 (…) 神が それゆえにわたしたちに会いに来ら れる、究極の最高の行為です。

(…)人生の旅路で出会う兄弟と真摯に向き合うとき、それぞれの心で働く、基本となる法です。いつくし

み、それはわたしたちの罪という限界にもかかわらず、いつも愛されているという希望を心にもたらすもので、神と人が一つになる道です」 [4]。

聖ヨハネ・パウロ二世は35年前に回 勅『いつくしみ深い神』を公布され ました。神の愛を如実に表わすことが、 言葉を度々黙想することが、わたを たちにいかにふさわしいこと現代しい 多様な経験がこのことを求めています。 しみと希望、心配と待望がこの を求めています」[5]。

聖ヨハネ・パウロ二世のこの言葉は 現代にぴったりと当てはまるだけで はなく、日毎に緊急さを帯びてきて います。わたしたちにはいつも神の 御憐れみが必要ですが、現代はそれ が焦眉のこととなっています。教皇 がローマ教区で多くの大聖堂を、ま

た各司教が教区で聖年の扉を開くと き、「わたしたちは、教会の生命と 全人類そして広大な宇宙を、キリス トの支配に委ねるのです。そうすれ ば、近い将来、すべての人の手によ る豊かな歴史が作られるようにと、 キリストがそのいつくしみを露が降 るようにもたらしてくださるからで す」[6]。聖ホセマリアは、オプス・ デイ草創期から、自分の経験に基づ いて、子どもたちを決して見捨てな い神の無限の愛により頼むようにと 切に願い、種々のやり方でイエスの 聖心の扉を叩くよう勧めていまし た。

3. 聖ホセマリアはこの世の道を、キリストがこの世にもたらされたいつしみで満たすよう教え、こう説明していました。「人々に仕えるためのわたしたちの献身は主の御いつくしみみの表われですが、主のいつくしみはわたしたちだけにではなく、全ての人に向けられたものです」[7]。イ

エスの傷ついた聖心から人類に絶えず注がれるいつくしみ深い愛が、個々のキリスト者と全ての善意の人々に満ち溢れるよう主に協力するため、創立者に手を引かれて進んで行きましょう。

こういうことで、子どもたちよ、い つくしみの聖年を真摯な信心と喜び をもって歩み始めるよう切にお願い します。神のいつくしみを高らかに 歌い上げている聖書から教えを汲み とることができるでしょう。特にキ リストの生活と教えにおける模範を じっくり見つめることです。聖ホセ マリアは、贖い主と親密に一致しつ つ、その足跡を辿るよう努めまし た。ですから、羊たちのために全存 在を傾ける神なる善き牧者(ヨハネ 10.1-18参照) に絶えず目を向ける ようにしていたのです。そして、わ たしたちだけではなく他の多くの人 たちにも、天地の主にもっとよく目 を向けるようにと勧めていました。

# 人類に対する神のいつくしみ

主は、最後の晩餐でユダヤの伝統に 従い大ハレル、あるいは賛美の歌と 呼ばれる詩編で祈られました。それ は神が実現された創造のみわざと歴 史を歌い上げている詩編で、一節ご とに「いつくしみはとこしえに」 (詩篇136)と繰り返しています。 「いつくしみのゆえに、旧約の全ての出来事は、救済の深い力で覆われています」[8]。同じことが新約聖書においては、神の御子の贖い主とれての受肉を通して十全に表明されて、中のむごい犠牲によって命を捧げ、とまるをお定めになったと諸秘跡をお定めになったとまる。

し、御母をわたしたちの母とされ、 約束の聖霊を送られるなどなど、主 の慈悲深さが表われている場面に立 ち止まり黙想しましょう。主の振る 舞いやお言葉は全て、父なる神のい つくしみのみ顔を写し出していま す。

同じことは、イエス・キリストのご 昇天後、教会の歴史の中にも見られ ます。光と闇の交錯するキリスト教 徒の旅路で、いつくしみ深い神の介 入がなかったことはありません。教 会に住まわれる聖霊、ご聖体におけ るキリストの現存、さらには聖母の いつもの執り成しは、主のいつくし みがふんだんに絶えることなく注が れていることを明かしています。天 の父に弛まず感謝しましょう。心の 扉を開け放ち、人々も神の恩恵に浸 ることができるよう働きかけましょ う。

## 神のいつくしみの歴史

5. 聖ヨハネ・パウロ二世は回勅『い つくしみ深い神』で教会生活の中心 に、また人類の歴史に、いつくしみ を中心に据えておられます。「終末 的完成においていつくしみは愛とし て啓示されます。それまでの時間の 段階では、人間の歴史のなかで、罪 と死のなかでは、愛は何よりもいつ くしみとして表わされ、いつくしみ として実現されなくてはなりませ ん。キリストの救世の計画は、いつ くしみの計画であり、それがキリス トの民の、つまり教会の計画となり ます。その中心には、いつも十字架 があります。十字架のうちに、いつ くしみ深い愛の啓示は頂点に達しま す」[9]。

事実、神の愛を表す十字架と復活を切り離すことはできません。復活の 秘義は全て神のいつくしみを表わし ます。福者パウロ六世が確言されま した。「救いの歴史は、人間のみじ めさを身に帯びておいでになる神の いつくしみに導かれています」 [10]。

キリストはわたしたちの罪を担い、「多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた」(ヘブライ9,28)のです。聖母は、罪以外わたしたちと同じ人間性をお取りになった方(ヘブライ4,15参照)の奉献を全く自由に受け入れ、真の同情をお示しになりました。聖マリアはMagnificatで「その憐れみは代々に限りなく、(主を畏れる者に)及びます」(ルカ1,50)と予言されました。

6. 子どもたちよ、神のいつくしみを 讃えるこの世代にわたしたちも生き ており、それを喜んでいます。創立 者は自分の生活において、またオプス・デイにおいて、主の特別な愛を 間断なく発見しました。「オプス・ デイの全歴史は神のいつくしみの歴 史です。」と度々繰り返し話し、 1960年代には次のように強調しまし た。「この手紙でも、これから記す はずの多くの文書でも、神のいつく しみ深い摂理を語りつくすことはで きないでしょう。神のいつくしみが わたしたちに先立ち、オプス・デイ はそのおかげで歩むことができたの です」[11]。この確信から「オプ ス・デイの歴史はひざまずいて記す べきだ」[12]と断言していました。 創立者は、オプス・デイがひとえに 神のイニシアティブによって創立さ れ進展したことを強調し、自分の務 めは神のみ旨に忠実な道具になるこ とだと自認していたのです。

事実、1928年以来、聖ホセマリアの存在とオプス・デイは緊密に絡み合っており、両者を区別したり切り離したりすることはできません。ある説教で述べています。「オプス・デイのことは全て神がしてくださいました。人間の目で見ると、そのとき何がありましたか?ただ快活さと

そのような一つひとつのことは、創ましたののでは、を託を主の御手への委託をものにするため役立ちため行うという。教皇フランシストが指す。「自分の人生はたったの人生はたったのでは、どこませんのできません。変をはいいないできまして無に対する愛の行為、惜しみないないできないできる。情しみない神に対する愛の行為、惜しみないのではいいできない。

力、痛みを伴う忍耐、どれもが決し て無にはなりません」[14]。だか ら、創立者は決して平和を失うこと はなかったのです。「子どもたち よ、痛悔には愛があります。いかな る仕事や労苦でもgáudium cum pace喜びと平和を失うことはありま せんでした。というのも、神が愛す ることお教えくださり、nullo enim modo sunt onerósi labóres amántium(聖アウグスティヌス 『De bono viduitátis』21, 26) 愛す る人にとって仕事は重荷ではないか らです。それゆえ、愛することを学 ぶことが重要です。in eo quod amátur, aut non laborátur, aut et labor amátur (愛するならばもはや 労苦はなく、労苦すら愛に変わる) (聖アウグスティヌス、同上) 幸せ は愛のあるところに存するからで す。このわたしの生き様は、神のい つくしみのおかげでした。神は、わ たしの幼少時から愛することを教 え、青年期に達したころわたしの心

に燃えるような愛の種を植え付けてくださいました。子どもたちよ、その種が今、枝葉を生い茂らせる高い木となり、多くの人たちがその木陰で力を取り戻しています」[15]。

7. 聖ホセマリアはいつもこのように 振る舞いました。神のご保護がいか に確実な避難所であるかという信念 を昔から身に付けていました。家庭 で両親から学んだこの信念は、司祭 職への準備のためログローニョの神 学校とサラゴサの聖カルロス神学校 時代に確固としたものになりまし た。サラゴサでは、茨の冠で覆われ た愛熱に燃えるイエスの聖心の絵に 深く感動しました。その後、スペイ ン市民戦争の間、この信心を新たな 形で示し、イエスの聖心の祭日前夜 の念祷の中で次のように語りまし た。

「わたしの神よ、わたしは御身の胸 の傷の傍らで自分を見つめ、わたし

の全ての子どもたち、今、御身のオ プス・デイの生きた成員である皆の ことを考えたいと思います。彼らの 名前を呼び、その資質や諸徳、欠点 を思い巡らし、その後、一人ひとり を御身の方に向かわせ、お願いしま しょう。深く入り込みますように! 御身の聖心に押し込みましょう。世 の終わりに至るまで、この超自然の 家族に加わる全ての人一人ひとりに このようにしたいと思います。皆が キリストの聖心において一致し、主 への愛において一つとなり、皆が、 犠牲の伴ったこの愛の力でこの世の 事柄から離脱しますように。初代信 者のようになりたいと思います。社 会の中で彼らの精神を再現しましょ う。最初に、オプス・デイの中で、 congregavit nos in unum Christi amor キリストの愛のうちに一つに なることを実現させることから始め ましょう | [16]。

ミサ聖祭の聖変化の後、聖ホセマリ アは、若いころ習い覚えたいつくし み深い神への祈りを心の中で唱えて いました。あらゆる時代の子どもた ちに及ぶオプス・デイにおける父と しての思いは、愛深いイエスの聖心 への信心によって深まっていったの でした。そして、ミサ聖祭において は全人類を贖うキリストの熱望に満 たされていました。このことを考え るとわたしたちも、世界の出来事や 個人の生活で遭遇する困難な状況 に、堅実で楽観的な態度で対処でき るでしょう。神は、常に同じであ り、全知全能でいつくしみそのもの であられ、いつでも悪から善を引き 出される方です。主に信頼する者に は、敗北を大勝利に変えてくださる のです。

8. 1970年代に、信仰と規律の危機が 人々に害を与えていた時、聖ホセマ リアは神からの新たな光を受け、神 の絶えることのない助けに対する確 信は揺るぎないものになりました。 1971年8月23日、ミサ聖祭の後、主 は、ヘブライ人への手紙の一節とほ とんど同じadeámus cum fidúcia ad thronum grátiæ, ut misericórdiam consequámur (ヘブライ4, 16参 照。"grátiae"は『ヘブライ書簡』で は "glóriae":訳者注)いつくしみを 受けるように、大胆に恵みの座に近 づこう、という言葉を彼の心に焼き 付けられました。すぐに、そのころ 傍にいたわたしたちに伝え、数週間 後、ローマの子どもたちとの親密な 家族の集まりでそのことを話しまし た。

「主なる神が皆にも知ってほしいとお望みのことを話します。オプス・デイの神の子どもたちは、ad thronum glóriæ 栄光の座に、つまりわたしたちが度々、上智の座としてお願いしている、神の御母でありわたしたちの御母、至聖なるおとめマリアに、adeámus cum fidúcia 強い

信仰をもって近づかなければならなりません。ut misericórdiam consequámur 神のいつくしみに与るために。(…)

甘美なるマリアの御心を通して、イエスのいつくしみ深い聖心に近づき、教会に主のいつくしみの力を表わし、わたしたちを強め、わたしたちが多くの人々を主に導きながら、前進できるようお願いしましょう」[17]。

この確信に突き動かされた創立者は、念祷で黙想するため、このご保護についての最もにでいての最もにでいている。このでは、は、ないではないでは、は、がでいたがでした。で発見」は、おいでではある「発見」は、消むし、対したのではないではないた大変ではあるに大変ではなったのでした。

「最近、神のいつくしみを語る聖書 の章句を熱心に黙想しています。聖 書記者はこの言葉を種々の意味で 使っていますが、いつくしみを単に 一般的な同情、あわれみの意味だけ ではなく、被造物に対する神の忠誠 であると考えていたのは確かです。

これがいかに素晴らしいことであるかに目を凝らしましょう。主なる神が人間のように同情されるのです。いつくしみには同情の意味もあるのですから。神は忠誠をもってわたしたち一人ひとりを父母の愛で見てくださいます」[18]。

創立者は、若いころに黙想した聖書のことばを常により一層深めて行きました。神は、人の子らを喜びとした(箴言8,31参照)のですから、確信をもってオプス・デイを進展させるために歩んでいきました。万策尽きたときも、この神の「喜び」に奮

い立ち、オプス・デイが前進することを確信していました。

#### 正義といつくしみ

本性です| [20]。

9. 師イエスが天の国の特徴を弟子たカトに説明されたたとえが「キリック教徒の大詩人が「キリー教徒の大詩人が「自己」といるというないないは、でいますの名したさいますが、大き記載していますが、大き記載していますが、大きによって、おいいの迷放を記載していますが、大きによって、まから解放したとれば、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これによって、これにはいる。

神のいつくしみ深い聖心を如実に表わしているのが、放蕩息子の帰りを来る日も来る日も忍耐強く待ち続け、不肖の息子が戻ってくるならすぐにゆるそうと待ち構えている父親

くまで、決して音を上げない父親の

の姿です。聖ヨハネ・パウロ二世は、この物『いつくしみ深い神』の中でるとしる深い神』のまました。当れていました。では、このを強調した。は変の要失、ますのでは、ますのでは、ますのでは、ますがいない。のは、はなのでは、ないないがは、ないないがはないがは、でいたのでは、、尊さとでのあり方のた、子としてのあり方のです」[21]。

創立者もこのたとえを同じようにコメントしています。「わたしたちは、示される神のいつくしみは、子どもます。 立ち戻るよう励まします。傍いこちよ、最も良いことは神の傍いこれが、人間的な弱さによって立戻りないが、人間のないでも放蕩息子の父ない。神はいつでも放蕩息子の父 親のようにさらなる愛をこめて受け 入れてくださいます」[22]。

聖ヨハネ・パウロ二世が説明されて いるように、このたとえ話には「葉に、このたとえいうという言葉をしていません。「けれども正義がしたとの関係が、この福音のたとされるとの関係が、変正確にしる格のではあるが、変正なが要求する、適格をはいるといるよりになります」[23]。

聖ホセマリアは、正義の実行は愛に基づいていることを母親の姿に見出しました[24]。彼にとって、神の正義は「いつくしみの深み」[25]として記憶されていたのです。「権利があるかのように主に近づくことはできません。詩編にMiserére mei, Deus, secúndum magnam

misericórdiam tuam (詩編50, 2) 神よ、わたしを憐れんでください、大いなる御いつくしみをもって、とあるようにわたしたちを憐れんでくださいと願うべきです。正義を盾に主に要求してはなりません」[26]。

10. 正義といつくしみを対立させる 人々が必ずいるものです。教皇は聖 年を始められるに当たって、この 誤った考えに注意を呼び掛けてい らっしゃいます。「それは相反する 二つの特徴なのではなく、愛の充満 という頂点に達するまで段階的に発 展していくただ一つの現実の、二つ の側面なのです(…)。

正しい人と罪人とを分ける判断としての律法の遵守だけを正義だとする見方に対し、イエスは、罪人にゆるしと救いをもたらすために彼らを探し求めるという、いつくしみの偉大なたまものを示そうとします。イエスがファリサイ派や律法学者から排

斥されたのは、そうした解放者としての考え方や革新の源泉によるものだと理解することができます」 [27]。

# 神のいつくしみにより頼む

11. 先に思い起こしたことですが、 神の特別な恩恵の実りとして、創立 者は聖書に輝き出ている神のこの上 もないいつくしみを深く極めまし た。例えば、ナインのやもめの息子 の蘇りの奇跡をコメントして、「た ぶんわたしたちは気づかない聖なる 理由で、主はわたしたちをお愛しに なりました。 misericórdia motus super eam (ルカ7, 13) 主はこの母 親を見て、憐れに思い、奇跡を行わ れます。聖ルカは、一人息子を亡く した貧しい未亡人だったと人間の考 え得る理由を挙げています」[28]。

葬列に加わっていた大勢の人々がおり、またイエスに付き従っている 人々もいました。しかし主だけがあ

の母親の嘆きに心を寄せ、近づかれ たのです。いつくしみ深い聖心は、 わたしたちに先んじてわたしたちに 必要なことを察し、行動されること に感嘆しませんか。贖い主のこの神 的人間的なお姿は、いつでも主に頼 りつつ励むべきことを示唆していま す。主のいつくしみを頼りにしてい た創立者が細かく解説しています。 「あなた方とわたしも主のいつくし みに頼らなければなりません。わた したちは神に対して何の権利も持っ てないのです。個人的に神の子でる と実感しているとしても、少なくと も、主よ、わたしはこのことを要求 します、などと言えないことは明々 白々です。わたしは、痛悔の涙と共 に主に近づき、御憐れみをお願いし ます | [29]。

聖ホセマリアは晩年になって、強い信頼をもって頻繁に神のゆるしを求める必要を感じ、Cor lesu Sacratíssimum et Miséricors, dona nobis pacem! という射祷を唱え始めました。この射祷は、1952年、オプス・デイと使徒職活動、教会と人類の必要を奉献するにあたり、イエスの聖心へ向けて唱えられたものでした。その頃から、教会と人々、世界のために天のご保護を求めることが創立者のさらなる日課になったのでした。

ここに、神のいつくしみに捧げられ た今年、神に願い求める主要な実り が浮かび上がります。それは、社会 の歩みが掟にそったものになり、 人々が神の愛熱の火で燃え立ち、教 会のどこにおいても明確な教義と真 の信心が再興されることです。教皇 の次の言葉でわたしの思いを伝えま す。「神の優しさと温かさを届けつ つ一人ひとりと出会えるよう、これ からの年月がいつくしみに浸ること を、わたしはどれほど願っているこ とでしょう。信じる人にも信仰から 遠く離れた人にも、すべての人に、

すでにわたしたちの間にある神の国 のしるしとして、いつくしみの芳し い香りが届きますように」[30]。

# 天の父のようにいつくしみ深くあり なさい

12. 教会は、誰をも除外することなく全ての人に神の愛を示そうと絶えず心を尽くしています。しれますといるフランシスは指摘されていますくとをでいますとしたちは長い間、されていたちは長い間、されているのではあるともでというではあるとのある目標によいうではあるとに進む必要があることに進む必要があることに進む必要があることに進む必要があることに進む必要があることに進む必要があることに進む必要があることに進む必要があることに強いすることに対しています。

自分と人々の罪のゆるしを神に願うだけでは不十分です。この願いは何事にも替え難いものですが、それには隣人に対するいつくしみの行為が

ことを忘れさせていました」[31]。

伴わなければなりません。「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが神から受けた掟です」(1ョハネ4, 20-21)。

慈善のわざは教会が繰り返し勧め実 践してきたことですが、これは善意 を具体化するのにふさわしい道で す。『カトリック教会のカテキズ ム』では、「慈善のわざとは、身体 的・精神的に困っている人々を助け る愛の行為です| [32]と説明されて います。これを熱心に実行すること が教皇の聖年の勧めの一つです。 「イエスの教えは、わたしたちがそ の弟子として生きているか否かを理 解するための、慈善のわざの数々を しめしています」[33]。

イエスが福音書で、明確に確固とし た基準を示しておられます。「人に してもらいたいと思うことを人にも しなさい。自分を愛してくれる人を 愛したところで、あなた方にどんな 恵みがあろうか。罪人でも愛してく れる人を愛している。また自分によ くしてくれる人に善いことをしたと ころで、どんな恵みがあろうか。罪 人でも同じことをしている。返して もらうことを当てにして貸したとこ ろで、どんな恵みがあろうか。罪人 さえ、同じものを返してもらおうと して、罪人に貸すのである。

しかし、あなた方は敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなた方の父が憐れみ深いも

のになりなさい」 (ルカ6, 31-36)。

### 身体的な慈善のわざ

13. カトリックの教えは身体的な慈 善のわざを「飢えている人に食べさ せ、宿のない人に宿を提供し、着る ものを持たない人に衣服を与え、病 人や受刑者を訪問し死者を埋葬する ことなど、中でも、貧しい人への施 しは兄弟愛のあかしの代表的なもの の一つで、神に喜ばれる正義の実践 でもある | [34] と要約しています。 つまりこれら全てのわざは、イエ ス・キリストがお与えになった愛の 新しい掟mandátum novum(ヨハネ 13.34) を実践することです。救い 主の勧めに従って教会はいつも貧し い人、病人、悲しんでいる人、家庭 のない人たちなどに特別な愛を注い でいます。また、最後の審判に関す るあの主のみことばを考慮してきま した。「はっきり言っておく。わた

しの兄弟であるこの最も小さい者の 一人にしたのは、わたしにしてくれ たことなのである」(マタイ25, 40)。そしてイエスは、善きサマリ ア人のたとえで、わたしたちの愛徳 は全ての人に及ぶことを明確にされ ました。

14. 教会の生きた部分であるオプ ス・デイにおいては、身体的な慈善 のわざを決しておろそかにしてはな らないことが執拗に繰り返されてい ます。創立者はオプス・デイ草創期 からそれを実行し、マドリードの 様々な病院を訪問し、悲惨な貧しい 人々や、見た目には普通の生活を 送っているように振る舞ってはいる ものの、実際は必需品にも事欠く恥 辱を耐え忍んでいた人々を寛大に助 けていました。そして、使徒職に近 づいた人たちにも同じことをするよ う教えました。これらの活動を聖母 に委ね、こうして、オプス・デイに おける「聖母の貧しい人々」を訪問

する習慣が生まれ、属人区の信者が働いている全ての所で、それを実践し続けています。聖マリアの日では、若い人たちに貧らある土曜日には、若い人をするようではからです。資気を表し、愛徳を実行ののです。「35」。全てこれは形成の手段です。若者に寛大さを促し、愛徳において成長させるからです。

徳において成長させるからです。 聖ホセマリアは、神は被告物をどの ように世話なさるのかということ に、いつも学び「この世の富が少数 の人々の間で分配されしているのを 見て心から嘆いて言われました。 「文化財も一部の人が握っていま す。そして、それ以外のところに は、食べ物と知識への飢えがあるの です。人間の生活は神から出たもの で、聖なるはずですが、実際には、 統計表の項目とかその数字としてし か扱われていないのです。このよう に現状を眺めると、先に述べたもど

かしさが解り、それに共感を覚えます。すると、これが動機となって、

『新しい愛の掟』を実行するよう絶えずわたしたちに誘いかけておられるキリストの方に視線を向けるようになるのです(…)。

兄弟である人々を見て、わたしたち との出会いを求めて来られるキーだれの生活であればなりません。立した の生活であっても、決してのの生活であるく、周囲のよう。どんではなるではないではなった。 もばらばらに分かれた一行の言はなく、皆が『神の詩』の一部由はなく、はないます。わたしたちの自はさいた協力を得ています。というにもとづいた協力を得て、神はにもとがいれるのです」 [36]。

何と多くの若者たち、つまり大勢の 少年や少女たち、さらに多くの大人 たちが、隣人の緊迫した窮乏に気づ いて、兄弟・姉妹である彼らのうち に貧しいキリストを見つけ出し、 人々への奉仕の心をより良く高めた ことでしょう。主は、無限に、満たり 寛大に、彼らを特別な恩恵で描の人 ました。ただ主だけがご存知の々が ました。ただ主だけがご存知のが がご存知のな献身を決意い 神と教会への全面的な献身を決ました。 それは、貧しい人かく ました。 た人、病人や囚人などを温かて 舞ったことで誘発されたのです。

15. オプス・デイの進展と共に、オプス・デイの信者や協力者の自発的な使徒職を通して、時代の情勢や様々な環境に合わせた、新たな形の物的な援助活動が生まれました。境が大都市の近郊で、様々なであるとでの大きのであると考えられている国々でのフードバンクなどの活動も盛んになりました。経済危機

に見舞われている現今では、多くの 男女が自身と家族の物的な不足を助 けてもらわざるを得なくなっていま す。

属人区の信者と協力者が連帯して推 進する活動が拡大していることを神 に感謝しています。しかし、わたちはこれで満足していること、キ もません。神の恩恵によって、これであってもの助けに支えられてあったちの助けに支えられて、このような企画の活動範囲を広げるよう望んでいます。

16. もう一度繰り返しますが、病人たちのお世話をより細やかにしてください。自宅や病院、その他どこであれ、身体的・精神的に苦しむ人々の居る場所で。当然のことですが、オプス・デイのセンターやアソシェート、スーパーヌメラリーの家庭でも。一人ひとりの病人は特別な形

でイエス・キリストを表わしている のです。

できる限りの医療を受けやすくする ことはもちろんですが、より重要な ことは霊的な配慮です。司祭にとっ ては、ゆるしの秘跡とご聖体の授 与、信徒なら、病人が祈りの精神、 つまり観想と感謝、賞賛と感謝を維 持できるように相応しいやり方で、 模範を示し、助言することです。例 えば、彼らが、ロザリオの祈りを唱 えたり、キリスト教的信心業を果た すことによって、苦痛の中でも喜び に満たされ、病気や苦しみ、それに 伴う限界を神に捧げることができる ならば、聖パウロが苦しみの救済的 価値を示して言っている「キリスト の体である教会のために、キリスト の苦しみの欠けたところをし(コロ サイ1,24) [37] 補いうることを知っ て感謝するでしょう。

死の危険に陥ったら、可能な限りの 実りがもたらされるように、最善の 注意を払って病者の塗油を受けさせ る準備をします。教会は、このいつ くしみの秘跡は、罪を赦し、また、 それがふさわしいことなら、病を治 してくれると言っています[38]。教 会の何世紀にもわたる伝統は、臨終 の時を待たずに、よく準備してこの 秘跡に与った人が大きな平和と落ち 着きを与えられたと伝えています。 何と素晴らしい家庭内の使徒職で しょう。というのも、無知のため か、あるいは病人が不安がるのでは という心配からか、愛する病人の意 識が失われるまで司祭を呼ばず、そ の世話を頼まないことがしばしば起 こっているからです。

17. 時の流れの中で、いくつかの身体的な慈善のわざに、その表現方法や適用の仕方に変化が見られます。 巡礼者の世話は現代では"無宿者に宿を提供する"と言われるようになって います。今では、仕事や生活の向上 などを求めて自国を捨てた難民のの ます。師キリストを含んでいます。師キリストち、このような人たち、ことを はその全家族に、配慮することを はなりません。特身で も疎かにして も疎かにもとさせなける あるキリスト者に思いを もないと ませなける ならないと とさせなける ならないと ませなける ないます。

教皇フランシスコは、緊急なことと して為政者たちに、そして全ての善 意の人たちに、具体的な援助法を考 えるよう促しておられます。すで に、使徒的勧告『福音の喜び』で次 のように呼びかけておられます。 「わたしたちは、新たなかたちで現 れている貧困と弱さに密に接するた めに、心を砕かなければなりませ ん。見かけ上、それらは具体的な益 を直ちにもたらすものではありませ んが、そこにおられる苦しむキリス トに気づくよう、わたしたちは招か

れているのです。すなわち、家のない人、依存症の人、難民、先住しまた。 族、孤独のうちに見捨てられて自者などのことです。移定とです。移りです。 問題がわたしに特別な課題をを変ももるります。 けてい教会、すべての者の母であるからです」 [39]。 最近、い初きが急務であると熱、この招きが急務であるといいます。 め、このいらっしゃいます。 は、ないないます。

 皇がこの活動で推奨しておられる特定の方法に目を向けて行うことに目を向けて行うことに目を向けて大たちと同じ、協力者や友人たちと同たなか多くが難民ための活動に取り組を主めることは聞いて感謝します。それであることはいる名において感謝します。というです。

## 精神的な慈善のわざ

18. 聖ホセマリアが打ち明けました。「わたしはあえて申しますが、惨めさや貧しさ、苦しみが全く無いかのように見受けられる社会環境においてこそ、キリスト教的愛徳に基づく鋭い洞察が何よりも急を要している人々を見抜くを必要としている人々を見抜くことができるのです」[41]。

隣人への愛の行為は、物的な援助が 必要であってもそれだけではないこ とを考えましょう。教皇は「貧しい 人が苦しんでいるもっともひどい差 別とは、霊的配慮の欠如なのですし [42] と述べておられます。教会の歴 史を特徴づけているのは精神的な慈 善のわざを推進したことで、それ は、今もこれからも常にそうあるべ きです。「疑いを抱いている人に助 言すること、無知な人を教えるこ と、罪人を戒めること、悲嘆に打ち ひしがれている人を慰めること、も ろもろの侮辱をゆるすこと、煩わし い人を辛抱強く耐え忍ぶこと、生者 と死者のために神に祈ること――、 これです」[43]。

このような霊的な愛徳は何と細やかなものでしょう。また、多くの人が孤独や無理解や迫害、陰口や中傷に悩まされている昨今には何と不可欠なことでしょう。それに天国への小道を知らずに、疑いに取りつかれて

いる人も多いのです。「今日、かつ ては想像すらできなかったほどの人 道的支援が可能になっていますが、 苦痛とか貧困とかの災難に対して計 会的救済策がいくら行き届いたとし ても、そのような社会的救済策は別 のレベルのことなのです。それら は、隣人と個人的、直接に係わる人 間味あふれた超自然的な愛の行為に 取って代わることは決してできない でしょう。近くの貧しい人や大病院 で病に苦しんでいる人、また、お金 持ちかもしれませんが、愛情あふれ る対話のひと時を求めている人、孤 独を癒し霊的な助けによって心の疑 いや迷いを取り去ってくれるキリス ト者の友愛を求めている人たちがい るのです | [44]。

あの物乞いの女性との出来事を思い起こしましょう。聖ホセマリアはただ霊的に司祭として人間的な愛情を与えることしかできなかったのです。その女性は、お礼としてオプ

ス・デイのために自分のいのちを捧げる決心をしました。後日、ある病院で彼女に再会し、あの物乞いの女性が主へ捧げたものを知った創立者は、彼女を未来の娘たちの中での最初の召し出しとみなしました。

19. キリスト教的連帯や兄弟愛の活動は数多くありますが、その中の幾つかだけを取り上げたいと思います。無知な人に教える、必要なるする、侮辱をゆるすこととできるいずれも、全ての人に対するともできた練された愛徳を表わなどものともの大や同僚、知人などもっともです。大々に対して持つべき態度です。

信仰の真理を知らない人に教えることは精神的な慈善の中でも基本的なものだと言えます。そのことを創立者はわずかな言葉で、「わたしたちの大きな使命は教理を教えることです」と要約していました。神と人々

の大敵は宗教的な無知だと強調し、 オプス・デイの仕事は、教会の救い のメッセージを全ての人々に届け、 実行するよう教える「広大なカテ ケージストだと明言していました。 「確信してほしいことがある。使徒 職とは、善、光、熱意、物惜しみし ない心、犠牲の精神、仕事に対する 粘り強さ、勉学における深さ、まこ とに寛大な献身、進歩に後れを取ら ないこと、教会への絶対で喜びに満 ちた従順、完全な愛徳…を広めるこ とである」[45]。このことは全て、 わたしたちが関わっている人たちを 教理的、霊的そして使徒職的形成に 与らせるためのもので、努力を要す ることです。わたしたちの職場や社 会、文化が、福音の真理で照らしだ されるとしたら何と嬉しいことで

このいつくしみの聖年に、多くの人がイエス・キリストの花嫁であり、 わたしたちの母である教会のぬくも

しょう。

りを感じ取るよう、熱心に努めましょう。それは、一人ひとりが「個人的に」友だちや同僚、知り合いを 形成の手段に近づかせるよう懸命に 努めるなら、神の助けによって達成 できるでしょう。

20. 勧めを必要としている人が様々 であるように、相応しい勧めをする 方法も様々です。まずはわたしたち の振る舞いによる証です。聖ホセマ リアがしつこく繰り返したように、 それが地上におけるキリストの歩み でした。創立者は、使徒言行録の 「イエスが行い、また教え始めた」 (使徒言行録1,1) という言葉を注 視し、イエスの模範を好んで熟考し ていました。自己の証に続いて、説 明するときになったら、明白で愛情 深い適切な言葉で、傷つけることな く、友人・知人の耳元で話すことで す。つまり、創立者が繰り返してい た「友情と打ち明け話の使徒職」で す。

言行一致は何と実り多いことでしょう。ときには、福音書が教えるように(マタイ18,15-17参照)、兄弟的説諭の形をとることがあるでしょう。それは、愛徳から、その友人に関心を持っているから生まれた勇気ある高貴な、実り豊かな慈善の行為です。

ベネディクト16世がこう述べてい らっしゃいます。「現在、わたした ちは概して、愛という概念と、他者 の身体的、物的福利への配慮に関し ては非常に敏感です。しかし、兄弟 姉妹に対する霊的な責任に関して は、ほとんど言及しません。しか し、初期教会や真に信仰が成熟した 共同体はそうではありません。彼ら は、兄弟姉妹の身体的健康だけでな く、霊的な健全さと究極的な運命に も心を配っているのです。 (…) キ リスト者の愛のわざにおけるこの側 面を再発見することが重要です| [46]。そして、続けておられます。

「悪を前にして沈黙してはなりません。真理に逆らい、いつくしみの道に沿わない考え方や行動をしている兄弟姉妹を戒めずに、対人関係や単なる個人的な都合から世間一般の考え方に迎合しているキリスト者すべてを憂慮しています」[47]。

隣人を助けるための通常の素晴らしい最上の方法であるこの福音の教えの実行が、いかに実り豊かであるかを教え続けた聖ホセマリアに感謝しましょう。これは愛徳から生まれ、真の謙遜と超自然的な賢明さをもって実行されるべきです。

「キリスト教的な忠告は、責めたり 非難し合ったりといった考え方のも とに行われるのではありません。そ れはつねに、愛といつくしみによっ て動かされ、他者の善を真に配慮す ることから生じます。使徒パウロが いうとおりです。『万一だれかが不 注意にも何かの罪に陥ったなら、霊 に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しり道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい』(ガラテヤ6,1)。個人主義が蔓延する世界で、わたしたりでは、兄弟間で忠告し合うことが不可欠です」[48]。

侮辱をゆるすことは、わたしたちが 神の子であり、神の子として振る 舞っていることの明らかがたしるとの明らかがたとの明らかがたとてもととてもいて知野であったとくこれを記憶にとおよるを記憶にはおよるを記憶にはおよるを記憶にはおよるを記憶にはあるません。侮辱の子にあるまじるときましてす。キリストの模範を忘れては なりません」[49]。聖ルカは主のご 受難を語るに当たってはっきりと記 しています。「されこうべと呼ばれ ている所に来ると、そこで人々はイ エスを十字架につけた。犯罪人も、 一人は右に一人は左に、十字架に けた。そのとき、イエスは言われ た。『父よ、彼らをおゆるしくださ い。自分が何をしているのか知らな いのです』」(ルカ23,33-34)。

このような振る舞いが容易でないことは明白です。しかし、神の恩初いとは明白です。教会の別ます。教会の初れになります。多くにいたるまでの多くのがそれを現代にいたるのがそれをあると言葉でないがした。といるはいるのはないでした。

「敵を憎むな、悪に悪を返すな、復 讐を捨てよ、恨みなしでゆるせ、こ の教えは当時も今も、異常で英雄 的、度を越した行為であると考えら れています。人間はそれほど『けち な』考え方をするようになっている と言わねばなりません。全人類を救 うためにこの世に生まれ、信者をご 自身の贖いのみ業に協力させようと 思召されるイエス・キリストは、ご 自分の弟子たち、あなたとわたしに 大きな愛、誠実、高潔で勇気あふれ る愛の必要を教えたいとお望みで す。キリストが一人ひとりを愛して くださるように、わたしたちは互い に愛し合わねばなりません。このよ うにしてのみ、つまり粗野なわたし たちではあるが、神の愛し方をまね ることによってのみ、すべての人々 に心を開き、新たな心で深く愛する ことができるのですから1 [50]。

わたしたちは自分の行った慈善のわ ざによって裁きを受けることになり

ます。「飢えた人に食べさせ、渇く 人に飲ませたか。よそからの人を迎 え、裸の人に着せたか。病人や囚人 とともに過ごす時間を持ったか(マ タイ25.31-45参照)。同じように、 以下についても問われます。不安や 孤独の原因になりがちな疑いの心を 持つ人が、そこから抜け出すために 力を貸したか。貧困から抜け出すの に欠かせない援助が受けられない何 百万もの人、とくに子どもたちが味 わう、教育を受けられない状態を打 ち破ることができたか。一人ぼっち で苦しむ人に寄り添ったか。自分を 傷つける人をゆるし、暴力を招く恨 みと敵意のすべてを捨てたか。わた したちに対してこれほど忍耐強い神 に倣い忍耐したか。最後に、兄弟姉 妹のことを祈りの中で主にゆだねた か。これらの『もっとも小さなも の』それぞれの中にこそキリストが おられるのです。キリストの体は、 拷問を受け、傷つき、鞭打たれ、飢 え、追われた姿として、再び新たに

見えるようになります。それは、わたしたちが、それらがキリストの体だと気づき、心を込めてそれに触れ、その体を支えるためです。十字架の聖ヨハネの言葉を心に刻みましょう。『夕べに、あなたは愛について裁かれるだろう』」[51]。

## ゆるしの秘跡の使徒職

教皇は、この秘跡について度々述べておられます。聖年の大勅書で「確信をもって、もう一度ゆるしの秘跡を中心に据えましょう。ゆるしの秘跡は、いつくしみの偉大さに触れさせてくれるからです。すべての痛悔者にとって、それは真の内的平和の泉となるでしょう」[52]。

同時に、オプス・デイ創立者が司祭 である息子たちに勧められ、心から 頼んでおられたことを黙想しましょ う。すべての司祭に当てはまること でもあります。「オプス・デイの司 祭が情熱を傾けるべきことは (…)、教義を教え人々を導くこ と、すなわち、説教し、ゆるしの秘 跡を授けることです。疲れを厭わず に、また反対されることを気にせず に、この務めに邁進しなさい。qui séminant in lácrimis, in exsultatióne metent (詩編126, 5)

涙と共に種をまく人は、喜びの歌と 共に刈り入れるのです。信徒である 子どもたちの使命は、多くの人をこの秘跡に招いて司祭である兄弟の仕事を増やすことです。それは彼らを喜びで満たすのですから」[53]。

23. 教皇が、聴罪司祭の存在自体が 「御父のいつくしみの真のしるしで ある」と述べておられます。「聴罪 司祭であることは、イエスと同じ使 命に参与すること、そして、ゆるし を与え、救いをもたらす神の愛が、 途切れることなく続いていることを 示す具体的なしるしとなることで す。それを決して忘れてはなりませ ん。 (…) だれもゆるしの秘跡の主 人ではなく、神のゆるしに仕える忠 実なしもべなのです。それぞれの聴 罪司祭が、放蕩息子のたとえのあの 父親のように、信者を迎え入れなけ ればなりません。自分の財産を使い 果たしてしまった息子にもかかわら ず、その子に駆け寄る父親のようで す。聴罪司祭は、回心して家に帰っ てきた息子を抱き締め、再会の喜び を表わすよう求められています。聴 罪司祭はまた、外にとどまり喜べず にいるもう一人の息子のもとに行く のも嫌がってはなりません。その息 子の下す厳しい判断は不当なもの で、それは分け隔てない御父のいつ くしみを前にしては意味がないと理 解させるべく説くためです」[54]。

24. 大勅書『いつくしみのみ顔』をよく読み黙想して、自分なりの結論を引き出すようお願いして結びにし

たいと思います。大勅書には、教会 の与える免償のたまものを頂くため の巡礼についても述べられていま す。それは、これからの数ヵ月間 に、聖母への子どもとしての細やか な信心を大いに豊かにすることにな ります。「この特別聖年の間、その 優しいまなざしをもって、わたした ちに寄り添ってくださいますよう に。そうしてわたしたち皆が、神が 柔和でおられることの喜びを新たに 見いだせますように。マリアほど、 人となられた神の深い神秘を知って いる人はいません。その全生涯は、 受肉した慈しみの存在で形作られま した。十字架につけられ復活したか たの母は、神の愛の神秘に深くあず かることで、神のいつくしみの聖域 に入られたのです | [55]。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

ハビエル

ローマ、2015年11月4日

[1] 第二バチカン公会議、『現代世 界憲章』40番。

- [2] 教皇フランシスコ、回勅 『Laudato Si』77番、参照。
- [3] オプス・デイのプレチェス、祈願。
- [4] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』2番。
- [5] 聖ヨハネ・パウロ二世、回勅 『いつくしみ深い神』1番。
- [6] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』5番。

- [7] 聖ホセマリア、手紙1930年3月24日、1番。
- [8] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』7番。
  - [9] 聖ヨハネ・パウロ二世、回勅 『いつくしみ深い神』8番。
- [10] 福者パウロ六世、一般謁見の講 話、1976年4月14日。
- [11] 聖ホセマリア、手紙1961年1月 25日、1番。
- [12] 聖ホセマリア、説教のメモ、 1952年4月11日。
- [13] 同上。
- [14] 教皇フランシスコ、使徒的勧告 『福音の喜び』279番。
- [15] 聖ホセマリア、手紙1961年1月 25日、3番。

- [16] 聖ホセマリア、説教のメモ、 1937年6月4日。
- [17] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1971年9月9日。
- [18] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1972年6月14日。
- [19] ダンテ『帝政論』1参照。
- [20] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』9番。
- [21] 聖ヨハネ・パウロ二世、回勅 『いつくしみ深い神』5番。
- [22] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1972年3月27日。
- [23] 聖ヨハネ・パウロ二世、回勅 『いつくしみ深い神』5番。
- [24] 聖ホセマリア、『神の朋友』 173番参照。

- [25] 聖ホセマリア、『道』309番。
- [26] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1971年9月11日。
- [27] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』20番。
- [28] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1971年9月25日。
- [29] 聖ホセマリア、家族の集いでの メモ、1971年9月9日。
- [30] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみの顔』5番。
- [31] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみの顔』10番。
- [32] 『カトリック教会のカテキズム』 2447番。
- [33] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみの顔』15番。

- [34] 『カトリック教会のカテキズム』 2447番。
- [35] 聖ホセマリア、『指針』1935年 1月9日、196番。
- [36] 聖ホセマリア、『知識の香』 111番。
- [37] 聖ヨハネ・パウロ二世、使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドローリス:苦しみのキリスト教的意味』 1984年2月11日、参照。
- [38] 『カトリック教会のカテキズム』1520番参照。
- [39] 教皇フランシスコ、使徒的勧告 『福音の喜び』210番。
- [40] 教皇フランシスコ、2015年9月6日「お告げの祈り」でのことば参照。
- [41] 聖ホセマリア、手紙、1942年10 月24日44番。

- [42] 教皇フランシスコ、使徒的勧告 『福音の喜び』200番。
- [43] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』15番。
- [44] 聖ホセマリア、手紙、1942年10 月24日44番。
- [45] 聖ホセマリア、『拓』927番。
- [46] ベネディクト16世、「2012年の四旬節のメッセージ」2011年11月3日1番。

## [47] 同上

- [48] ベネディクト16世、「2012年の四旬節のメッセージ」2011年11月3日1番。
- [49] 聖ホセマリア、『神の朋友』 309番。
- [50] 聖ホセマリア、『神の朋友』 225番。

- [51] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』15番。十字架の聖ヨハネの引用は『光と愛の言葉』57。
- [52] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』17番。
- [53] 聖ホセマリア、手紙、1956年8 月8日35番。
- [54] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』17番。
- [55] 教皇フランシスコ、大勅書『いつくしみのみ顔』24番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/itsukushiminoseinen-tegami/(2025/12/14)